

## 這恢亭日乗……書くことがなくて

内田 満夫

タイトルに大作家の作品名を気どつてみた。「這恢」は私流街ぶら「ハイカイ」の当て字だ。「日乗」とは日記のことである。

私が当ペンクラブとご縁ができたのは、「800字文学館」の公募がきつかけだった。応募原稿を送付したのが二〇一四年の九月だから、それからちょうど十年目になる。爾来、エッセイ・コラム欄と年誌『悠遊』投稿の二本立てでおつきあいをしてきた。

実は、それに先立つ半年ほど前に、地元新聞社主催のカルチャー教室に入門して文章修行を始めている。講師はSFジャンルを得意とするプロ作家のT先生。教室のメンバーは常時七、八名だ。コアメンバーは、私のように十年以上のしぶとい在籍組が三名。あとは一年から三年程度の新参者である。ときどき見学者があつて、そのうちの何人かが新たに教室のメンバーに加わる。

この教室のよいところは、どんな作品でも先生が褒めてくれることだ。テーマの適否、文章の構成や展開など、できが悪くても先生は決して野暮を言わない。だから生徒はのびのびと思いのまま一人よがりを書くことができる。ただし、てにをはや誤字・脱字の類にたいするチェックは厳しい。

和気藹々と楽しい教室だが、生徒には共通の悩みがある。書くネタがないのだ。教室は月に二度。日常の生活のなかで、習作としてかたちになりそうな材料がそうそうあるものではない。私自身も月に二編、年に二十四編だから、この十年で二百編以上の習作を生み出したことになるが、だんだんきつくなっていた。

苦しまぎれに、『書くことがない』なるタイトルで三度ほど書いた。やったことといえば、他のメンバーの作品のなかからこれといった手がかりを拝借し、それを出汁に駄文を綴ることだ。「魔女」「落ち武者」「サグラダファミリア」「ガガーリン」「由比ガ浜」などを引き合いに出して、思い当たる自分の物語を展開してみるとそれなりの体裁の文章はできる。

更にはいい手を思いついた。それが「日記スタイル」である。林文子の『放浪記』もこの手の日記延長作品だ。終わることなしに、いつまでも書き続けることができる。「カメモシがパソコンのへりを登ってきた」なんてことでも、日記体裁のなかでならさりげなく書くことができる。先生はこつちのほつが面白いといってくれたから、日記作戦成功だ。これだとしばらく書くには困ることはない。

ところで恐れ多くも私があやかつた永井荷風の『断腸亭日乗』。実は作品のタイトルを知るだけで、読んだこととてなかつたのだ。この一文を書くにあたり、あわてて作品を取り寄せ大作家の日乗世界をかいま見たのは勿論である。